

### 「人生が二度あれば」

井上陽水の歌のひとつに、「人生が二度あれば」というのがあります。どこか物悲しい歌詞です。どうしてそんな歌を急に思い出したのかといいますと、年末に読んだ本のひとつに、内館牧子著「今度生まれたら」があり、それと関係しているようです。陽水の歌は、「両親の人生が二度あったらどうしたのだろう？」という問いかけに終わっていますが、内館牧子の本はそれに対する一つの答えを示しているように思えて面白いのです。とりわけ終わりの“落ち”は笑えます。

表題の「人生が二度あれば」とは、「無いものねだり」の最たるものでしょう。ただ、人間は、しばしばこの“ないものねだり”をするものです。人生には何度か選択を迫られることがあります。その時の選択でその後の人生が大きく変わることもあるでしょう。ですから、あるとき、こっちでなくてあっちを選んでいたらどうなっただろうか？とは誰も一度や二度は思うものではないでしょうか？あるいは、あるとき、「これが、あるいは、あれがあったらもっとこうできたのに」、などと思ったりするのではないのでしょうか？内館牧子はテンポよく、その思いを読者に伝えてくれます。他愛ない、といえばそれまでですが、面白く読めて、自分はどうだったろうか、という思いに駆らせてくれます。

確かに、振り返ってみますと、進学するとき、就職するとき、結婚するとき、転職のとき、と思えば、転機というべきタイミングはいくつかありました。別の選択に思いをはせるとき、想像の世界をさまようことが出来ますので、作家はこうして物語を作っていくのかもしれませんが、事実、今こうして思い直してみますと、違う人生があったような錯覚に落ち入ります。

でも、現実の人生は、二度はないこと、そして限りがあること、この二つは万人に共通で、何人も変えることが出来ません。だから誰も必死に生きようとするのではないのでしょうか？

12年前に大学を定年退職した直後に、次の仕事を始めるまでに3か月の空白の時間(?)がありました。ただ、この時ほど、幸せを感じた時間はありませんでした。なぜなら、誰からも拘束されない、いやな仕事は断れる、好きなことだけをやっていけばよい、というのは、現役の時の多様な多忙さに比べれば、文字通り天国の様な至福の時間でした。ただそのとき、「この時間が永遠に続くとしたらどうだろうか」と思った時、気が遠くなるような思いに駆られました。造物主から、「そうだろう。だから与えられた時間は有限なのだ」といわれているような気がしたものです。納得させられたような気がしましたが、それは“諦観”というものとも違っているようにも思えるのです。

“この生は 一度つきりと想うもの  
悔いることなく 奢ることなく”  
(令和3年1月1日)